

日本の性解放理論の思想的背景 日本統一思想研究院 大谷明史

今日、日本では、文化的共産主義というべき性解放理論が猛威をふるい、伝統的な純潔教育はほとんど顧みられなくなってしまった。日本の性解放理論を構成しているのは次のようなものである。

- ① ジェンダー・フリー思想
- ② 性の自己決定論
- ③ (ネオ) マルクス主義フェミニズム

(1) ジェンダー・フリー思想

1. 「ジェンダー・フリー」の登場

「ジェンダー」とは、社会的、文化的に形成された性であるという。それは本質的なものでなく、家父長的な、男性支配の社会で形成されたものであるとして、「ジェンダー・フリー」は、そのようにして形成された「男らしさ」「女らしさ」を抹殺しようとする。

結婚においては、女性が男性の性を名乗るのは、男性による女性の支配だと考えて、夫婦別姓を主張する。韓国では夫婦別姓が実施されているが、韓国では、子どもは皆、夫の姓を名乗るのであって、男性を通じた先祖からの家系が明確になっている。ところが日本の夫婦別姓は子どもの姓は、夫か妻のどちらでもよく、結局、先祖からの血統のつながりが分からなくなってしまう。すなわち、先祖との関係が切れてしまうのである。

さらに結婚も男女に限定すべきでなく、「同性愛 (ゲイ、レズ)」や「バイセクシャル」を「異性愛 (男女の愛)」を同列的に扱うべきであると主張する。その結果、正常な男女の愛を無視、ないし軽視するようになるのである。

文化人類学者の山口智美は、1995年には「ジェンダー」と「ジェンダー・フリー」という言葉が登場したと、そのいきさつについて次のように述べている。

1995年前後は、日本の女性運動にとって、重要な転換点だった。94年、男女共同参画審議会がつくられたことで耳なれない「男女共同参画」という言葉が登場し、95年には、同審議会による「男女共同参画ビジョン」と「男女共同参画2000年プラン」のなかで、「ジェンダー」という言葉が登場した。そして、「ジェンダー・フリー」という言葉も東京女性財団によって紹介された。……その一方で、この時期、「フェミニズムはおわった」「ポストフェミニズム」といったような記事もよく見かけた。(山口智美『バックラッシュ

ユ!』双風舎、244頁)

この「ジェンダー・フリーが登場した95年が、行政と学者主導の運動に転換した重要な時期だったことを、思い起こしてほしい。……今後、女性運動は何を達成目標として運動をしていくべきなのか。そういった、根源的な問いとして、95年の転換を考えるべきであろう。(山口智美『バックラッシュ!』279頁)

日本において、1995年は、女性解放運動としてのフェミニズムを越えて、男女の性別を否定し、解消する「ポストフェミニズム」に転換した年であった。言い換えれば、女性解放運動は、女性の権利を主張する運動から、学者を中心とした思想の闘いに転換したのであった。

2002年には、男女共同参画審議委員であった大沢真理(東大教授)は、『21世紀の女性政策と男女共同参画社会基本法』のなかで、『男女共同参画』はgender equalityをも越えて、ジェンダーそのものの解消、『ジェンダーからの解放(ジェンダー・フリー)』を志向すること、これである」と言って、「ジェンダー・フリーとは、ジェンダーからの解放である」と、定義したのである。(山口智美『バックラッシュ!』260-61頁)

2. ジェンダー・フリー思想の理論的背景

①ポストモダン・フェミニズムによる男性中心の言語と文化の否定

ポストモダン・フェミニズムとは現代フランス・フェミニズムのことであり、それを代表するのがクリステヴァ(Kristeva)、イリガライ(Irigaray)、シクスー(Cixous)である。男性中心主義の言語——男根ロゴス中心主義の言語——の内部では、女は表象不能なもの、すなわち、女は価値の低いものとして扱われている、と彼女たちは主張した。そこでポストモダン・フェミニズムは、男根的言語体系を攪乱するとか、男根的言語体系の外に、独立した女性的言語体系を確立しようとしたのであった。日本の「ジェンダー・フリー」思想は、そのようなポストモダン・フェミニズムの影響を色濃く受けている。

②クィア理論によるジェンダーと性の攪乱

クィア理論の代表的な思想家の一人がジュディス・バトラー(Judith Butler)である。彼女によれば、カテゴリーは本質的に不完全なものであって、ジェンダーはパフォーマンスなものにすぎず、ジェンダー・アイデンティティは錯

覚、幻影であり、存在しないという。それはまさに、ジェンダーからの解放を唱える「ジェンダー・フリー」思想を支えるものである。バトラーの理論は、現代もっとも注目されるジェンダー理論と見なされている。

元お茶の水女子大学教授の竹村和子は、バトラーの代表作『ジェンダー・トラブル』について、「本書を読むことは、血沸き肉躍るスリリングな体験だったのです。『ジェンダー・トラブル』は出るべくして出た。そしてこのような書物が世に出ることを待ち望んでいた読者は多かったと思います」（『上野千鶴子対談集・ラディカルに語れば』平凡社、158頁）と感激的に語っていた。

（２）性の自己決定論

1. 性の自己決定論の主張

社会学者の宮台真司は、1992年頃から、援助交際を素材として「性の自己決定論」を展開したという（宮台真司『バックラッシュ！』29、37頁）。性行動は、倫理・道徳や、親や教師などによって、規制されるものでなく、自分の判断で決定すべきであるというのが、その主張である。彼は次のように主張する。

売買春一般や、青少年の性行為一般を「いけない」と断定しないこと

年齢には議論の余地があるとはいえ、私は、刑法が性的同意年齢として認めている13歳以上、児童福祉法が児童と規定している18歳未満の男女（以下、青少年）について、これを相手として買春行為を行うことを禁じる法的規程について、条件付き賛成の立場である。

その条件とは第一に、社会的法益ではなく個人的法益の保護を目的とすることを明確化すること。第二に、売買春一般や、青少年の性行為一般を「いけない」と断定しないこと。第三に、性的自己決定能力上昇の教育プログラムが現に実行されていること、である。（宮台真司他『性の自己決定原論』261頁）

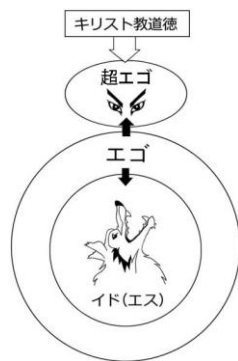
売買春は必ずしも悪くない

わが国における議論は、（１）「売春」の是非、②「低年齢の性」の是非、③「低年齢の売春」の是非、（そして（４）「性虐待」の是非）の問題を、混同させている。……まず（１）の「売春」の是非について。結論的には私は、個人対個人が自由意思で行う単純売春（非管理売春）については、1970年代以降のヨーロッパの流れに従って、早急に合法化するべきだと考える。理由は幾つかあるが、「家父長制的差別」の弊害が最も大きい。（宮台真司他『性の自己決定原論』紀伊国屋書店、263頁）

2. 性の自己決定論の理論的背景

①フロイトによるキリスト教道徳の否定

フロイトのモットーは「イド（エス、悪しき衝動）と超エゴ（封建道徳）に対して、ともに闘う」ということであった。すなわち、人間を抑圧しているキリスト教道徳を否定せよという一方で、人間の中の野蛮な心であるイド（エス）を自律的、合理的なエゴで抑圧せよというのであり、彼は性の民主主義を主張したのであった。すなわち、フロイトは絶対的、普遍的な規範——神の戒め、ロゴス、天道など——を否定することにより、性行動の決定は個人の意思にまかせるべきであるという性の自己決定(self-determination)の主張に道を開いたのであった。



②フロイト左派の性解放理論

フロイトは、人間を本来、性的な存在と見た。その自然の成り行きとして、性の解放（フリーセックス）を主張するフロイト左派が生まれた。ライヒは、性的な満足（オルガスム）を得ることによって、神経症は治ると主張した。マルクーゼは文化のエネルギーは性欲からくる、と主張した。宮台真司の、「青少年の性行為一般を『いけない』と断定しないこと」

「単純売春(非管理売春)については、早急に合法化するべきだ」などの主張は、フロイト左派に通じるものである。

③英国の自由主義哲学

宮台真司は、自身の自己決定理論は英国自由主義哲学、特に J. S. ミルの思想に基づいていると言う。(宮台真司他『性の自己決定原論』255 頁)

しかし、国際政治学者の中川八洋が言っているように、ミルの「他人の自由を害しない限り何をやってもよい」というミルの「自己決定」の「自由」には、

自らの「不倫」を正当化する目的もあったのである。

このような「自己決定」は、英国社会主義の開祖 J・S・ミルの『自由論』(1859年)によって初めて造語された概念である。が、ミルの眼目の一つは、極めて私的なものであった。なぜなら、『自由論』そのものが、一妻二夫主義のテイラー夫人の愛人(第二の夫)となったミルが、その「第一の夫」やその子供らと共棲する「異常な家族」に対する世間のごうごうたる非難に、「私の自由だ！私の勝手だ！大人の男女関係は自己決定させろ！」と反論した個人的な“反駁の書”であるからだ。一般的に自由を論じた通常の哲学の理論の書ではない。「異常不倫」を自己正当化すべく、屁理屈をためらう余裕もない状況下で書かれた書であった。

「他人の自由を害しない限り何をやってもよい」というミルの「自己決定」の「自由」は、むしろ、自らの「惇徳の自由」たる「不倫」を正当化する理屈以外の目的もあった。「自己決定」をもって「唯一の確実な永続的な(社会)改革の源泉」としたように、個人の「自己決定」を、英国を社会主義社会に改造する有効な手段と見なしたからである。社会主義社会とは伝統や慣習から切断された個人からなる人工的社会である。かくしてミルは、伝統や慣習から離脱せよ、と次のように煽動する。ミルにおいて「自由」のことである「自己決定」とは、「慣習を打倒せよ！」という社会改造運動の理論(理屈)であった。(中川八洋・渡部昇一『教育を救う保守の哲学』徳間書店、149-50頁)

中川八洋は、さらにミルの『自由論』とは、そのように、社会全体を無徳と惇徳の「放縦の自由」の巷と化すための、劇薬であったと言う。そして宮台の自己決定論は、まさにそのような劇薬を受け継いだのである。

またミルは、「自己決定(自由)」が「個性」を伸張し、この「個性」の発揮において、個人は幸福となり、社会も飛躍的に進歩するものだと考えた。「個性が自己を主張することが望ましい」「個性の自由な発展が、幸福の主要な要素」などである。しかも、この「個性の発展」がたとえ「欲望や衝動」に従ったものでもよい、とミルは考えた。つまり、倫理・道徳は慣習の一つであるから、これは全面無視してもよいと説くのである。

1990年代半ば、日本で女子中高校生の売春(「援助交際」)を正当化しようとした極左[宮台真司]の言説が、ミルの「自己決定」や「個性」論をもち出したが、ミルの『自由論』とは、そのように、社会全体を無徳と惇徳の「放縦の自由」の巷と化すための、劇薬であった。(中川八洋・渡部昇一『教育

を救う保守の哲学』151頁)

(3) (ネオ) マルクス主義フェミニズム

1. (ネオ) マルクス主義フェミニズムの主張

(ネオ) マルクス主義フェミニズムは、マルクス主義に対する批判を通過したフェミニズムである。すなわち、「彼女たちは、まず第一にフェミニストであり、フェミニズムの目的のためになら、マルクス理論の利用をためらわず、必要ならその改訂も辞さない人々である」(上野千鶴子『家父長制と資本制』岩波書店、12-13頁)。彼女たちは、第一義的にフェミニストであり、第二次的にマルキストなのである。その代表的人物が東京大学名誉教授で社会学者の上野千鶴子である。

上野はフェミニズムの立場から次のように言う。

家族は権力関係

家族の中で、人々は再生産をめぐる権利・義務関係に入り、たんなる個人ではなく、夫／妻、父／母、親／子、息子／娘になる。この役割は、規範と権威を性と世代とによって不均等に配分した権力関係であり、フェミニストはこれを「家父長制 patriarchy」と呼ぶ(上野千鶴子『家父長制と資本制』岩波書店、30頁)。

私の価値は私が決める

女についてはもっとあからさまに、男に認められることが女の価値だといわれてきました。それに対してフェミニズムは、「男に選ばれようと選ばれまいと、私は私」という思想の装置を提供してきた。「私の価値は私が決める。男に選ばれることによって、私の価値は決まらない」フェミニズムは、そのように女の自己解放のために思想を鍛えてきたわけです(上野千鶴子『バックラッシュ!』432頁)。

上野はさらに、マルクス主義の立場から、次のように叫んでいる。

万国の家事労働者よ、団結せよ

「家事労働」という不払い労働こそが、階級形成のための物質的基盤である。共産党宣言をもじれば「万国の家事労働者よ、団結せよ」というのが、唯物論的フェミニストの戦略になろう(上野千鶴子『家父長制と資本制』84

頁)。

2. (ネオ) マルクス主義フェミニズムの理論的背景

①マルクス主義の搾取理論

マルクス主義の「資本家による労働者の搾取」をフェミニズムの立場から「男性による女性の労働の搾取」と読み替えたのであった。

②クィア理論

上野千鶴子は、クィア理論のセジウィック (Sedgwick) が提起した「ホモソーシャル」(homosocial, 男性の連帯による女性への支配) の概念は、目からウロコのような大きな転換をもたらしたと言う (『上野千鶴子対談集・ラディカルに語れば』平凡社、166 頁)。

(4) 純潔教育の否定

1. 純潔教育から性教育へ

1949 年に文部省が『純潔教育基本要綱』を出し、純潔教育を推進した。その中で、「純潔教育は単に性教育の部面にとどまることなく、一般道徳教育、公民教育、科学教育、芸能文化教育において……」というように、性教育を純潔教育の一部としてとらえていたのであった。(田代美江子「性教育バッシングを検証する」、木村涼子編『ジェンダー・フリートラブル』白澤社, 199 頁)

ところが 70 年ごろから「純潔」という言葉が批判されるようになり、性をめぐる価値観が多様化していった。そして 1995 年には、ジェンダー概念とジェンダー・フリー概念が登場したのであった。さらに、1999 年、文部省が『学校における性教育の考え方、進め方』を発行し、「性教育」という用語が正式に使用された。

2. 性教育の目指す到達点

教育学者の田代美江子は、日本の性教育の目指す到達点について、次のような点を挙げている。

- ①全面的な純潔教育の否定
- ②科学的な知識に基づく性教育の重要性の確認
- ③性の問題は人権の問題 だという把握
- ④性の社会的・文化的側面を学ぶ視点
- ⑤関係性を学ぶという視点

⑥多様な性のあり方を学ぶ必要性の明確化

(田代美江子「性教育バッシングを検証する」、木村涼子編『ジェンダー・フリートラブル』203-204頁)

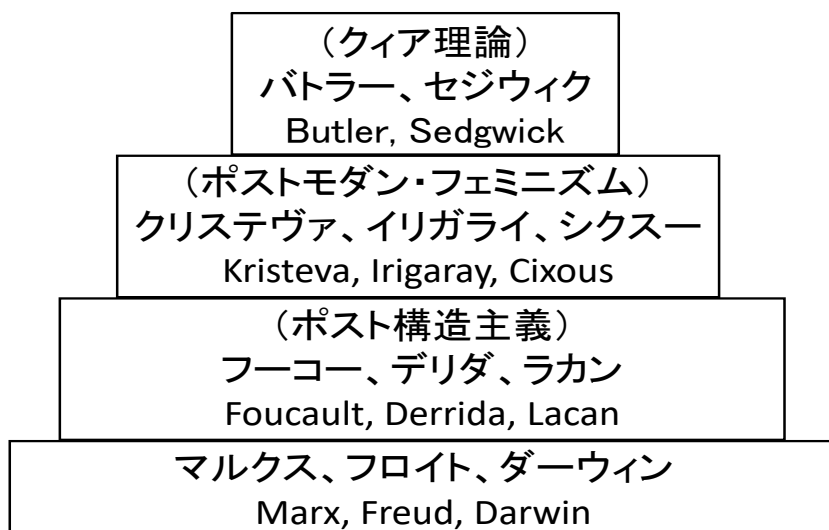
性教育論者たちの言う、科学的な性教育の「科学的」とは、唯物論的、無神論的ということである。それは神の言、ロゴス、天道、天理としての倫理・道德の崩壊に至るものである。

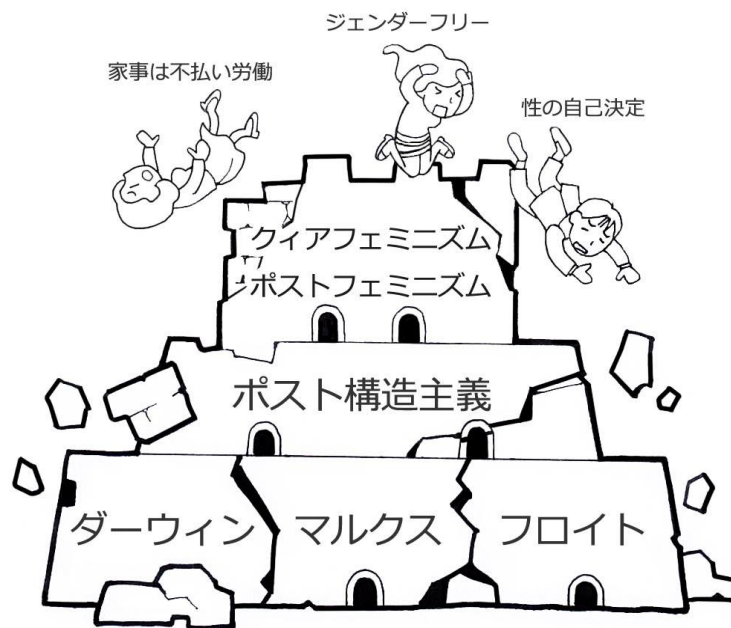
アメリカにおいて包括的性教育が実施されたが、それも結局、性解放につながるものであった。その後、アメリカでは禁欲を中心とした新しい性革命、自己抑制教育が高まっている。

3. 性解放理論の崩壊

マルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義の土台の上にポスト構造主義が生まれ、その土台の上にポストモダン・フェミニズムが生まれ、その土台の上にクィア理論が生まれた。そしてそれらを背景にして、今日、日本を始めとする性解放理論が展開しているのである。従ってマルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義の根本土台が崩壊すれば、性解放理論も崩壊する運命にあるのである。

性解放理論の土台となっている思想





4. 性解放理論を超えて

フェミニズム、ジェンダー・フリーの崩壊の後に来るのは、純潔に基づいた、真の男女の愛、真の夫婦愛である。そこでは、男性による女性の支配、差別、虐待はなく、女性による男性に対する反抗もない。男女が真の愛で共に喜ぶ、男女の真の平等が実現される。そのような真の家庭が土台となって、理想社会・理想世界が築かれるのである。